論文の内容の要旨

論文題目　　幕末外交儀礼の研究
　　――欧米諸国外交官による登城・将軍拝謁式を中心に

氏　　名　　佐 野 真 由 子

本論文は、幕末に来日し、駐在を開始した欧米諸国の外交使節が将軍の居城に迎えられ、今日皇居で行われる信任状捧呈式とほぼ同義と言ってよい将軍拝謁式に臨んだ全 17 のケースについて、背景と実際の経過を追い、その意義を考察したものである。

「外交儀礼」は、外交官の日常の行動規範全般を指すこともある広範な用語であるが、その中で信任状捧呈式は、本国元首の名代である使節が駐在国の元首に見え、二つの身体が国家を体現して相対するという最も本質的な場面である。それをもって、まず両国間の公式な関係の存在が象徴的に確認されるとともに、国際慣習上、実質的にも、その儀式を経て初めて外交官は業務を開始することができる。

考察の前提として、第 1 章では、徳川政権下でのより広い儀礼伝統、とくに、本研究の議論にとって重要な基盤をなす朝鮮通信使迎接儀礼の実態、さらに以降の本論で重要な役割を果たすことになる幕臣筒井政憲の、その時点までの対外経験の蓄積を概観し、第 2 章では、幕末に形成された外交儀礼のもう一方の源泉である欧米の外交儀礼を瞥見した。これに続き第 3～6 章で、17 例にわたる幕府の検討の跡を具体的に追跡した。

第 3 章では、安政 4（1857）年 10 月 21 日に初めて実現した初代アメリカ総領事ハリスの登城・拝謁を詳しく分析した。ハリスの受け入れをめぐり賛否の分かれた幕府で、彼を江戸城に迎えて将軍拝謁式を挙行する方向への決断を可能にさせたのは、安永 7（1778）年生まれの長老、筒井政憲の見解である。筒井は日本が今回の例に匹敵する国交を保ってきた相手が朝鮮のみであったことを「御舊典」として尊重しながらも、少なくとも朝鮮とは国交があったゆえに他国への拡大が可能であるとの論理展開を示し、議論に突破口をもたらした。その後、実際の式典準備も筒井

の提案に従い、朝鮮通信使迎接儀礼を先例として参照する形で行われた。同時に、ハリス自身との間でも率直な意見交換が重ねられ、互いの慣習の調整が図られた。

この過程からは、当時現場にあった幕臣らが、ハリス迎接ないしその先にある欧米諸国との交際を未曾有の事態と受け止めたのではなく、彼ら自身が長く維持してきた慣例を土台に、環境の変化に応じて一つの新たな様式を準備するという意識でいたことが浮き彫りになる。ハリスのほうもまた、自身が最終的に迎え入れられた式の次第を、その本質において西洋の作法に適うものと捉え、ここに二つの伝統の融合がなったのである。

続く第 4 章では、以上を起点に、万延元（1860）年まで重ねられた儀礼様式をめぐる試行錯誤の過程を見た。ハリスの次の事例となったのは、最後のオランダ商館長から領事官となったドンケル＝クルティウスの将軍拝謁（安政 5 年 4 月 1 日）である。民間の通商関係とされていた日蘭関係が公的なものに変化し、同一人物を相手にその扱いを改めなければならなかったこの件は、先のハリスのケース以上に、実質的な議論の機会と西洋の外交慣例についての一歩進んだ理解を幕府にもたらした。その過程では、「向後外國官吏等參府之規則」をつくるとの言い方で、同種の儀礼執行を幕府の通常業務として平準化しようとする方向が見出された。

実際、これに続いて、日露追加条約批准書交換のため四たび来日したロシア使節プチャーチンの将軍拝謁（安政 5 年 7 月 12 日）、総領事から公使に昇格したハリスの再びの拝謁（安政 6 年 10 月 11 日）は、「向後外國官吏等參府之規則」に沿って淡々と実施された。しかし、初回と相違する点があったことからハリスと議論になり、「拝謁仕直し」騒動が発生、現に「仕直し」となった万延元年 7 月 4 日の拝謁に向けて、幕府は外交儀礼様式のさらに本格的な確立をめざし、そこでは「永世不易の禮典」という言葉が使われた。こののちすぐ、幕府から積極的に声をかける形で、信任状捧呈の順番待ちをしていた初代イギリス公使オールコック、同フランス公使ド＝ベルクールの拝謁が実現し（万延元年 7 月 9 日、21 日）、「永世不易の禮典」が重ねて確認された。

その後、幕末外交儀礼は安定実施期に入り、これを主に扱ったのが第 5 章である。この間に実施された将軍拝謁儀礼は以下の 6 件であった。

・文久元（1861）年 2 月 23 日、アメリカ公使ハリス（遣米使節関連大統領書簡の捧呈）。
・同年 11 月 5 日、同上ハリス（開市開港関連国書の捧呈）。
・文久 2 年 3 月 28 日、同上ハリス（帰国挨拶）。
・同年 4 月 19 日、同上第 2 代プリュイン（着任挨拶）。
・同年 5 月 27 日、フランス公使ド＝ベルクール（公使昇任、開市開港関連国書の捧呈）。
・同年閏 8 月 9 日、ロシア領事ゴシケーヴィチ（開市開港関連皇帝国書の捧呈）。

一方でこの時期、攘夷派の台頭を背景とする殺傷事件が多発していた事実を念頭に置かねばならない。周知の桜田門外の変、アメリカ公使ハリスの秘書ヒュースケンの暗殺から生麦事件に至る数々の波乱にもかかわらず、それと一線を画して淡々と外交儀礼が執行されていた。それでこそ、最も基本的な部分で国家間の公的な関係が維持され、また、いかなる場合にも最低限の関係を維持するのが儀礼の機能なのであって、このときすでに、日本はそのような外交態勢に入っていたと見ることができる。

しかし、文久 3 年からしばらくは、外交官側からいくつかの要請はあったものの、同種の儀礼が行われることはなかった。その主な理由は、将軍家茂の上洛が繰り返され、江戸の居城で主人の不在が多くなったことにある。将軍の身体と相手国元首の名代たる外交使節の身体が直接向か

い合うことを本質とする外交儀礼がこうした状況下で休止状態に陥ったのは、むしろその本質ゆえに当然の成り行きであり、本稿ではここまでの経緯を含めて「幕末外交儀礼様式の成立」期とした。

こののち将軍が第 15 代慶喜に交代したのを機に、本来の拠点である江戸を離れたまま、出先の大坂城で将軍拝謁儀礼が挙行されることになった。第 6 章では、慶応 3（1867）年 3 月 25 日から 4 月 1 日にかけて、第 2 代イギリス公使パークス、第 2 代オランダ総領事ファン＝ポルスブルック、第 2 代フランス公使ロッシュ、第 3 代アメリカ公使ヴァン＝ヴァルケンバーグの 4 ヵ国代表を大坂に招き、国別に将軍拝謁式が実施された経過を論じた。

幕府はこのとき、基本形としては、先に「永世不易の禮典」として成立していた式次第をそのまま執行する計画であった。ただし同時に、準備の初期の段階で、担当の外国奉行から老中へ重要な新規要素が提案された。将軍臨席の晩餐である。その背景には、このときまでに幕府の使節がヨーロッパを訪れた際の経験があった。

結果として、各国代表はそれぞれ、正式な将軍拝謁式（「本拝謁」）の日に先立ち、「内拝謁」と称して城に招かれ、フランス料理の饗応を受けた。一方の「本拝謁」については、4 ヵ国のうちイギリス公使のみが、部下の公使館員中、ヨーロッパの儀礼慣行をよく知るミットフォードを指名して幕府と式次第の協議にあたらせ、彼の指摘によってわずかな修正（他の 3 ヵ国にも適用された）が加えられたのち実行に移された。全体としてこの際の拝謁式は、慶喜の個人的資質とも相俟って外交団側に高く評価され、幕府の外交をいったんは軌道に乗せ直した。

終了後、幕府は一連の式次第などを文書にまとめ直し、幕府内の対外業務関係者に周知するとともに、これを機に老中や奉行が外交官らとの個人的交際を深めるよう指示を出すなど、意欲的な動きを見せた。しかし現実には、この意気込みが十分に生かされることはないまま大政奉還に至り、徳川政権下での将軍拝謁式も以上が最後の事例となった。

翌慶応 4 年以降、外交儀礼は明治天皇によって執行されるようになった。その初期の様式は、幕府が整えた手順とよく似ていたと考えられる。無論、幕府から明治新政府に引き継ぎをしたわけではないが、新政府側で儀礼準備を担当した者が助言を乞うたのはやはりミットフォードであった。ミットフォードとて、知る限りの儀礼慣行を教示したのみであり、幕府の儀礼を新政府に伝えようとの意思を持ったわけではあるまいが、自ずと彼自身、また彼を中心とする外交官たちの側が蝶番の役割を果たし、すでに十分に形成されていた「幕末外交儀礼」の形が明治へと受け渡されていったのである。

本稿で論じた幕末の外交儀礼は、儀礼研究の角度からも、外交史研究の角度からも、従来ほぼ完全に見過ごされてきた。その実態に光を当てた本研究を通じて、条約交渉等の政治過程と絡み合いながらもつねに別次元の検討課題として存在した、より象徴的、文化的な側面における徳川幕府の外交実践、ひいては対外認識の変遷を明らかにすることができた。

「幕末外交儀礼」は、その 11 年間の命脈の入口において、朝鮮通信使迎接の伝統に代表される、幕府が長くアジア域内で蓄積してきた国際関係業務の経験を、欧米諸国を対象とする新たな外交の展開へと接続させる舞台となった。他方、11 年間の出口においては、そこで最後に実行された儀礼、さらにはそれを契機に始められつつあった対外関係改善の努力は、まさに「徳川外交の集大成」と呼ぶべきものであり、そのまま欧米社会を相手に近代の外交として機能し、政権が替わったのち、明治以降の具体的な営みに円滑に移行しうる形を整えていた。

生きた人間の身体に国家元首ないし国家そのものを体現させる西洋の外交儀礼は、その儀礼空間で向かい合う者相互の「対等」を表現することに究極の意義がある。徳川幕府がこのような性格を持つ儀礼を整え、西洋国際社会との接触の初めに 11 年間にわたって挙行したことは、最も根本的なところで日本の対等外交の素地をつくったと評価することができる。